りけるが、宇兵衛は大人のぬぎおける脚半を見るに、その裏の赤き事すはうもて染たる布の如し、あやしみながら水もてそゝぎ見るに、水さへいと赤くなりたり、いぶかしとおもへど、大人の物思はむこともやとそこにては語らず、日をへてかう〳〵有しと言ければ、大人もいかなる祥ならんと思はれしが、東都に歸りて後にきけば、その日は雨富の師なりし雨谷といひける撿校のことに當りて、總錄のつかさとられし日にあたれりとか、神も大人の誠をいたしてのみけるにめでゝ、かゝる神異をも示されし成べし、

〔古學小傳中〕本居宣長○中略

春庭ハ宣長ノ男ナリ、後ノ鈴屋ト號シ、建藏ト稱シ、後健亭ト改ム、語學ニ精シク、詠歌ニ長ゼリ、活語ノコトヲ啓發シテ、宣長ノ未ダイハレザルコトヲ述テ、後學ヲ益セリ、中年瞽者トナリケレドモ、强記ニシテ、學ノ道ニテモ門人コトニ多シ、文政十一年戊子十一月七日、身マカリヌ、年六十六、

〔塵塚談下〕當戊年十○文化一年十月より、淺草觀音境内奥山え、頓智なぞと云看板をかけ、盲坊主廿一二歳と見ゆるもの出たり、見物一人に付錢十六文宛にて入る、見物人よりなぞをかけるに、更にさし支る事なし、若解けざる時は、掛し人へ景物に、蛇の目の傘などをくれる事也、故に見物の人、景物を取らんと、なぞをかける人多し、たま〳〵解ざるなぞ出る事も有よし、此者の才覺頓智なる事を感心驚ざるものはなし、奇なる盲者にて、奥州二本松の產なるよし、撿校保己一が類の奇人と云べし、

〔窻の須佐美三〕紀伊の國の足輕に、田舍に住る許に、出世のため、京上りする坐頭來りて、日の暮かかり、宿かるべき所まで行がたく候間、ひそかに宿かし給はれと、わりなく賴みけるほどに、一夜留てけり、明けて後暇乞して、立出し跡にて、あるじの妻、座頭の寐たりし跡に行て見れば、こがねを二三百ばかり袋に入て指置けり、其儘夫に見せ、是を落したらんは、出世の望絶ん計りに失ひ